

ミニ展示 「敵味方に分かれた兄弟 一鱸 成信と伴 兼之の悲劇」

敵味方に分かれた兄弟 すずき しげのぶ ばん かねゆき 鱸 成信と伴 兼之の悲劇



実際の展示風景

国内最後の内戦—西南戦争では親戚・兄弟が、それぞれの立場・信念から敵味方に分かれて戦った。

兄、鱸 成信と弟、伴 兼之。

出羽庄内藩士 伴 兼定の次男・四男として現在の山形県鶴岡市に育った二人は、西南戦争では敵味方に別れて戦い、奇しくも同じ植木の地で戦死した。

本展示では、戦争により引き裂かれた二人の兄弟の数奇な足跡、さらに、その後の物語りを紹介する。

兄弟の略歴

伴 兼之（ばん かねゆき）

安政 5 年(1858) 10 月 18 日～明治 10 年(1877) 3 月 20 日

明治 8 年(1875)、友人榊原政治とともに、他県人ながら庄内と鹿児島
の交誼をもって鹿児島私学校に入学。二人は優秀で、フランス
留学生を予定されるほどであった。

西南戦争が起きると、寄寓先の篠原国幹から帰郷するよう勧められ
たが、一身を西郷に託すと請うて参戦する。

伴は榊原とともに河野主一郎隊(五番大隊一番小隊)に属し、熊本城
攻城戦、転じて田原坂の戦いに参戦。3 月 20 日、植木にて戦死した。

鱸 成信（すすき しげのぶ）

生年不詳～明治10年（1877）4月6日

同じ庄内藩士 鱸家の養子となり、明治8年（1875）、家督を相続する。

明治4年（1871）、旧主酒井忠篤の内意を受け、陸軍教導団に入学。その後、ドイツ留学、士官学校を経て、明治8年に陸軍少尉に昇進する。

西南戦争では、第一連隊第三大隊第二中隊長（第一旅団）として参戦。高瀬の戦いで負傷し治療を受けるも、癒えぬうちに戦線に復帰。4月6日、植木口において戦死した。



鱸 成信（左）と伴 兼之（右）
二人は12歳の差の兄弟であった。



鱸 成信

明治5年撮影。

前年に入学した陸軍教導団（下士官の養成組織）
在籍時のもの。26歳当時。



酒井 順長 松本正義 榊原政治
伴 兼之 中台直常 長澤光暉

伴 兼之と同郷の友人たち

左から 伴 兼之・酒井順長・中台直常・松木正義・長澤光暉・榊原政治

「明治8年頃 浅草横濱馬車道 内田久一写真館にて撮影」とある。

幼い容姿だが17歳頃とみられる。

当時、一緒に写っている鶴岡の少年達とともに選抜され、上京してフランス語を学んでいた。
内田九一（久一は誤り）は、明治天皇の御真影ほか各界著名人を撮影するなど、「東都随一」と称された写真師である。

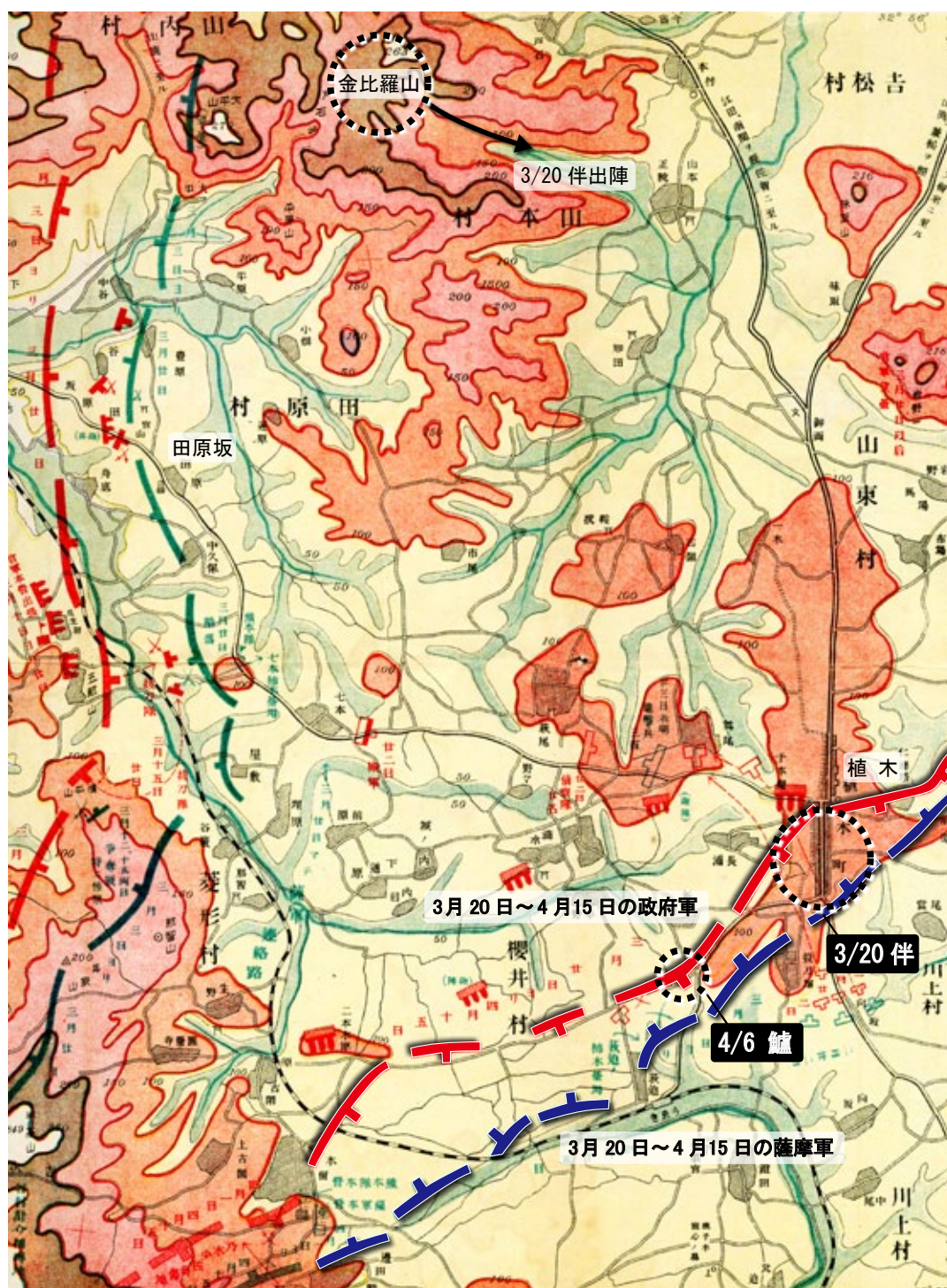
兄弟の戦死地

伴 兼之の戦死

3月20日早朝、金比羅山を守備していた河野小隊長は、田原坂陥落の報を受け、半隊を児玉軍治に預けて新たな戦場である植木方面に向かわせ、半隊は予備軍として適宜進退することを命じる。伴は児玉隊に属し、植木の戦いにおいて乱戦のなかで戦死した。享年19。

鱸 成信の戦死

4月6日、荻迫の激戦の折、鱸は隊員56名を率い、他の2中隊とともに左翼先鋒を担い、植木本道より荻迫方面を目指した。石塔台場付近で薩摩軍と衝突、13発の弾を受け壮絶な死を遂げた。享年32。



西南戦争の戦況図 ※熊本県教育会発行(大正9年)に加筆。



◀ 鱸 成信墓

七本官軍墓地にある。砂岩製墓石。

正面 陸軍少尉正八位鱸成信之墓

右側面 明治十年四月六日於熊本縣下
肥後國山本郡植木戦死

左側面 東京鎮台歩兵第一聯隊第三大隊第二中隊

背面 山形縣羽前國田川郡鶴岡士族



▲ 伴 兼之招魂碑

鹿児島市南洲墓地にある。安山岩製。

「大泉人伴兼之招魂碑」（大泉は鶴岡の地名）と刻む。
江戸時代以降の鹿児島地方に独特の墓石形態である。
植木にて戦死した時、友人榊原は敵軍に突入して伴
の遺体を収拾し、これを見た政府軍からもその義勇
を賞賛されたという。

伴の遺体は、榊原が山中の安全な場所に埋葬したとも、
山鹿市光専寺（薩摩軍病院）に葬られたともいわれ
ているが定かではない。



▲ 榊原政治墓

鹿児島市南洲墓地、伴の招魂碑の隣にある。安山岩製。

「羽前国莊内人 榊原政治墓」と刻む。

御船において被弾し、5月10日、搬送された延岡病院にて没した。享年18。

墓石は大正7年（1918）、子孫によって建てられた。

背負いの松

明治27年（1894）2月、鱸の遺児 孫太郎は父の供養のため、松を背負って鶴岡から熊本に発った。途中、東京にて関係者から鱸の最期の様子を聞き取るなどして、同月26日、七本官軍墓地に眠る父の墓に参り、供養のため松を植えた。

長き道　せをす松を今ここに　植てたむくる身にそうれしき

旅程は孫太郎が記した『御墓参日誌』に詳しい。出立3日目の2月19日、風雪にみまわれて詠んだ歌に、その労苦が偲ばれる。

山をろし　せおいし松にさからいて　音こそ寒き山里の空

この松は「背負いの松」として、今も人々に親しまれている。



七本官軍墓地「背負いの松」